特集

北の戦争遺産をめぐる

レール最北端、稚内の戦後80年

鉄道が到達する最北端、稚内（わっかない）は、国境の街である。
南下するロシア、欧米列強が行き交う宗谷（そうや）海峡に向き合う歴史を刻んできた。
アジア太平洋戦争終結後に
樺太（からふと）（サハリン）からの引き揚げ者を迎えたのも、この街だ。
それを物語るように、稚内には、さまざまな戦争遺産がたたずんでいる。
終戦から80年。戦争遺産が発する声に耳を傾けてみよう。

宗谷海峡を見つめて

北緯四十三度の札幌を出発して、北緯四十五度の稚内へ。特急「宗谷」の車窓が、針葉樹やチシマザサからなる高山のような景観へ変わっていく。地球の緯度にして二度分の遠大な北上は、風景をガラリと変える。そして到達するのが、わが国最北端の駅、稚内駅だ。かつてこの先にも日本があった。樺太、現在のサハリンである。

サハリンの島影が見える宗谷岬の丘の上に、明治時代の望楼（ぼうろう）が建っている。日露戦争を前にした一九〇二年（明治三十五）、宗谷海峡を監視するために築造された旧海軍の施設だ。稚内最古の建造物でもあり、風雪にさらされた石の地肌が歳月を物語る。周囲は宗谷岬公園として整備され、アジア太平洋戦争において宗谷岬沖で日本軍に撃沈された米海軍潜水艦の戦死者を悼む碑も建っている。これは日米合同で建立されたものだ。

宗谷岬から内陸へ未舗装の道を車で入っていくと、森の中に忽然（こつぜん）と三棟のれんがの建物が現れる。戦後、

（写真上）大岬旧海軍望楼。日露戦争の際にはロシアのバルチック艦隊の監視にあたったと伝えられている。
稚内市指定有形文化財。稚内市宗谷岬2。

文＝北室 かず子
写真＝田渕立幸

長くベールに閉ざされていた旧海軍大湊通信隊稚内分遣隊幕別送信所だ。こんなところに一体なぜ…。

稚内市歴史・まち研究会の会長・富田伸司さんは「初めて目にした時、朽ちていくばかりのありさまで、茫然自失になってしまいました」と言う。同会は、稚内赤れんが通信所という通称をつけ、三棟をA棟、B棟、C棟と名付けて保存に取り組んでいる。A棟とC棟は一九三〇年（昭和五）から一九三一年（昭和六）に建てられ、望楼のあるB棟は一九四一年（昭和十六）にできたと考えられている。この年の十二月二日、大本営から発せられた「新高山登レ 一二〇八」が、十二月八日の開戦を伝える暗号電文であったことはあまりにも有名だ。三棟が揃った年、日本は後戻りできない道に踏み出したのだ。富田さんいわく「この有名な暗号電文を赤れんが通信所が中継送信したと伝えられています。さらに、戦争末期、硫黄島から栗林忠道中将が発した決別電報を受信したという記載も『稚内百年史』にあるのです。稚内赤れんが通信所は常に最前線とつながった重要な通信基地だったことがわかります」。

3

4

5

6

C棟に掛かる「旧海軍大湊通信隊稚内分遣隊幕別送信所」の表札→の前で、左から八重樫さん、富田さん、熊田さん。「大湊」は宗谷岬一帯を指し、「幕別」は赤れんが通信所のある恵北地区の旧地名だ。

稚内赤れんが通信所A棟（左）とB棟（右）。NHKドラマ「望郷」（2005年）ではシベリアの捕虜収容所に、映画「北の桜守」（2018年）では樺太のシーンに使われ、ロケ地としても有名だ。

1.屋根の修復を終えたB棟。稚内赤れんが通信所は通常は開放しておらず、稚内市教育委員会に電話で申し込み、対応可能であれば見学できる。稚内市教育委員会☎0162・23・6056。**2.**B棟に設けられた展示室で往時の写真や地元建設会社が寄贈したジオラマが見られる。**3.**B棟のれんが壁は鉄骨で補強された。タイルはペチカの一部だとか。**4.**B棟の望楼の中。**5.**B棟望楼からC棟を望む。**6.**C棟には復元された日本初の実用ストーブ「カッヘル」がある。幕末、箱館奉行所の役人・梨本弥五郎と五稜郭設計者・武田斐三郎が箱館停泊中のイギリス艦で見て設計図を描いた。梨本は宗谷警備に就いた。

その実像を明らかにしたのが、一九四三年（昭和十八）十二月から一九四五年（昭和二十）三月まで稚内海軍通信隊に配属されていた大宮佳弘（おおみやよしひろ）さんへの聞き取り調査だった。同研究会副会長の熊田要二（くまだようじ）さんと稚内市教育委員会の学芸員である斉藤譲一（さいとうじょういち）さんが、大宮さんの住む長野県に出向いて行った。

稚内市ノシャップにあった隊では約七十人の通信兵が昼夜三交代で米国、英国、中国、ソ連の暗号無線を傍受していたという。斉藤さんいわく「開戦の暗号電文を中継したと伝えられている件については、大宮さんは関わっておられませんでしたし、文書も残されていません。しかし聞き取り調査によって、道内最大規模の通信所でさまざまな職種の人が働いていた軍隊の姿を知ることができました」。大宮さんの仕事は、二基ある発電

斉藤さんは、稚内の自然・産業・人・歴史への学びの場である「稚内学」にも立ち上げから17年にわたって取り組む。

機を毎日交互に運転し、直流の電気を蓄電池にためて稚内通信隊に送ること。蓄電池室ではガラス製の電池槽に液が満たされ、鉛の基盤二百二十基が並列につながれていた。「通信は電気ありきなんです」と斉藤さん。大型レーダーを備える隊は大量の電力を必要としたのだ。

稚内を離れた後、大宮さんは潜水艇「海龍」のエンジン整備を担当し、生還することのない若き兵を幾人も送り出したという。

遺構を守る

稚内市歴史・まち研究会は、最も小さいC棟から通信所の補修に着手した。屋根は大半が落ちてしまっていたが、鉄骨の小屋組みが残っていたため稚内の金属工業組合がボランティアで屋根を葺いた。「菱葺き」という伝統的な工法で、ベテランの職人さんが若い職人さんに教えながら作業し、技術の伝承にもつながった。大工組合、建具組合も無償で協力した。木材の寸法は昔の寸法に合わせて材を挽き直したそうだ。

C棟修復は、稚内の職人さんたちが力を結集し、ボランティアで成し遂げた。写真提供＝稚内市歴史・まち研究会

建物の保存は待ったなしだ。大雪の重さに耐えかねてB棟の屋根が崩壊した際は、皆、途方に暮れたという。富田さんいわく「開戦の年の建築なので既に鉄が不足していたのか、B棟だけ骨組みが木だったんです。太陽財団さんの助成事業に応募し、幸いにも一千万円もの助成をいただけました。さらにクラウドファンディングで百人以上の方々が支援してくださり、崩れた屋根の改修、望楼と周辺の屋根の補強ができました」。しかし最大のA棟は手つかずだ。事務局長の八重樫昇さんはこう語る。「道北を代表するれんが建築であり、かつ戦争遺産としての意義がある建物です。ぜひ三棟揃って残したいですが、A棟はなにせ大きいので、危険な部分を取り除いて公開する方向で保存できたらと考えています」。

副会長の熊田要二さんは開戦の年に樺太大泊に生まれ、一九四五年八月二十日に母と四人きょうだいで引き揚げた。父は三年後に帰ってきたが、成人前に父母を亡くし、農家、木材工場、農協で働いてきた。昭和三十年代から稚内赤れんが通信所のある恵北地区に住む。「稚内では一九七二年（昭和四十七）まで米軍が駐留していたので、学校で米兵から英語を学んだり、子どもたちと母親たちがクリスマスパーティーに招待されたりし、家で酒を酌み交わしたこともあります。C棟に展示している古写真は米軍経由で入手できたものです。ここは呉、佐世保、舞鶴などと並ぶ海軍通信系の主要局。二度と戦争を起こさないために、遺構を守り、歴史を後世まで伝えていきます」と決意を語ってくれた。熊田さんは見学希望者があれば無償で案内をしている。

稚内市歴史・まち研究会が誕生

A棟の前を歩く富田さん（右）と熊田さん。熊田さんとB棟は同じ年に誕生した。

したきっかけは、稚内市が（一社）日本建築学会北海道支部に歴史的建造物の調査を依頼したところ、市内に約百五十もの歴史的建造物があることがわかったことだ。その中の歴史的に重要な建物を街の遺産として残そうという気運が地元の建築士会を中心に盛り上がり、二〇〇六年（平成十八）に発足。「稚内は国境の街ですから、独特の建造物や物語が数多く残されています。先人たちの思いとともに平和の尊さを後世に伝えることが私たちの役目だと考えています」と富田さんは言う。活動は多彩でアクティブだ。赤れんが通信所周辺を桜の名所にしようと約二千本もの苗木を植樹したり、凍った雪上を歩いて赤れんが通信所を散策する堅雪散策会や歴史巡りツアー、講演会を精力的に行う。真珠湾攻撃の十二月八日に合わせ、灯篭を点し、慰霊と平和を祈願する「平和祈念の灯り」は毎年の恒例行事となっている。

稚内市歴史・まち研究会の活動内容と市内の歴史モニュメントをまとめたパンフレット。研究会では会員32人が精力的に動いている。

2019年、崩れたB棟のれんがを市民が手作業で積み直した。写真提供＝稚内市歴史・まち研究会

終戦で終わらなかった悲劇

さて、今年八月十五日は終戦八十年の節目。催しの予定をうかがうと、富田さんはしばし沈黙した後、こう言葉を続けた。「終戦で終わりではないのが、稚内の歴史なんです。子どもの頃から稚内公園にある『九人の乙女の碑』を見てきましたが、学べば学ぶほど悲惨であることがわかってきます。三船殉難事件もあります。そこで今年は歴史を学ぶ講演を増やす予定です」。

当時、約四十万人もの日本の民間人が居住していた南樺太は、終戦直後にソ連の侵攻を受け、激しい戦闘によって約二千人もの命が失われた。八月二十日には、真岡郵便局に連絡業務のために残っていた電話交換手の女性十二人のうち九人が青酸カリなどで自決した。

稚内市街と宗谷海峡を望む高台、稚内公園にある「九人の乙女の碑」。稚内市宝来2丁目8-13。

この悲劇を追悼するのが「九人の乙女の碑」である。三船殉難事件は、八月二十二日、樺太から稚内を経て小樽に向かっていた緊急引き揚げ船三船が留萌沖でソ連の潜水艦による攻撃を受け、推定千七百八人が亡くなった事件で、そのほとんどが女性、子ども、高齢者だった。

稚内副港市場にある稚内市樺太記念館では、樺太の暮らしと戦後の苦難を知ることができる。館内でひときわ目を引くのが、勇壮な横綱の写真。昭和の大横綱、大鵬だ。三船殉難事件のうちの一隻、小笠原丸からは途中の稚内で八百八十七人が下船したが、その中の一人が五歳の大鵬だったのである。

斉藤さんは「江戸時代、南下する

●稚内市樺太記念館／稚内市港1丁目6-28（稚内副港市場2階）☎0162・73・6066。10:00～17:00（最終入館16:40）。4月～10月は無休、11月～3月は月曜（祝日の場合は翌日）、年末年始休館。入館無料。

ロシアへの警備に東北諸藩の武士たちが派遣された歴史もある稚内は、古くから国境の街なのです。日露戦争の旧海軍望楼、アジア太平洋戦争の稚内赤れんが通信所、旧陸軍砲台指揮所は国境の街ならではのモニュメントです。それが長年、市民自らによって守られている意義は大きいです。そういう姿勢が建物の価値もいっそう高めるのだと思います。稚内には悲しい経験をした方々がおられ、そういう経験を見てきた街だからこそだと思います」。

終戦から八十年が経った二十一世紀の現代も、繰り返されている戦争。戦争の痕跡が発する叫びを今ほど真剣に受け止めなければならない時はない。 J

（上）防波堤に激突する波しぶきから乗客を守る、庇のついた構造の稚内港北防波堤ドーム。稚内と樺太の大泊を結ぶ稚泊航路で引き揚げた人々を迎えた。1936年（昭和11）竣工。（右）稚内市樺太記念館には北防波堤ドームと連絡船と列車の関係がわかるジオラマを展示。

北海道の戦争遺産を見に行こう

北海道の海岸線には戦争遺産が点在している。日露戦争に備えて函館山から津軽海峡を監視すべく築かれたのが、函館要塞だ。北海道の石炭、木材、室蘭で製造された鉄鋼を運ぶために津軽海峡の重要性が飛躍的に増し、青森県側の砲台も加えて津軽要塞となる。函館山は機密保持のため半世紀にわたって入山禁止だった。現在、北海道遺産「函館山と砲台跡」に選定され、要塞跡の散策に訪れる人も多い。

十勝、釧路、根室、胆振（いぶり）地域などの太平洋岸には多くのトーチカが残っている。トーチカとはアジア太平洋戦争末期に築造されたコンクリート製の防御陣地のこと。大樹町旭浜のトーチカのコンクリートの厚さは最大1.8mもあり、見学スポットとして整備されている。

函館要塞の要、千畳敷戦闘司令所跡。写真提供＝函館市

大樹町旭浜のトーチカ群。写真提供＝大樹町

1941年（昭和16）築造の旧陸軍砲台指揮所跡は宗谷黒牛が放牧されている宗谷岬牧場にある。当時、日本領だった樺太南端クリリオン岬の指揮所と対で宗谷海峡を監視した。両者を合わせて宗谷要塞という。砲台指揮所跡は道路から見られる。

宗谷海峡を隔てて横たわるサハリンの島影。